特集 1

当時の恩師はいま……
（長崎外国語大学名誉教授　戸口 民也先生）

長崎学院は2025年に創立80周年を迎えました。今回は特集企画として、長崎外国語短期大学時代から、長年にわたり本学で教鞭を執ってこられた戸口民也先生（フランス語専修）のインタビュー記事を掲載します。

戸口先生の研究や授業に込められた思い、外国語を学習することの意義、さらには最近のご活動にいたるまで、お話しをうかがってきました。

先生がフランス17世紀演劇研究を志されたきっかけ、研究の魅力を教えてください。

小学生の頃から子供用にリライトされたヨーロッパの物語・小説をよく読んでいましたが、中学生になると生意気にも原作をそのまま翻訳したものも読みはじめました。高校生になってからは小説から戯曲へと関心が広がり、シェークスピアなどを（翻訳でしたが）読むようになりました。とくに気に入ったのがマリヴォーというフランスの劇作家です。小説や映画も含めてフランスのものが性に合うなと感じたので、大学は仏文科に入りました。

フランス演劇とくに17世紀演劇を選んだのは、1966年、大学２年のときにラシーヌの悲劇『アンドロマック』を見たことがきっかけです。劇団四季が日生劇場で上演したものでした。大学入学当初から卒業論文のテーマはどうしようかと考えていたのですが、この劇を見てラシーヌに決めました。歌舞伎や文楽も見に行く演劇好きの学生にとって、ギリシャ古典の影響を継承するフランス古典劇との出会いは大きかったです。

17世紀という時代はフランスにとって、いわば黄金時代でした。哲学、思想、文学、演劇、美術、音楽、建築など、様々な分野ですぐれた人物たちが続出し、ヨーロッパに大きな影響を与えることになった時代です。

大学・大学院ではラシーヌをテーマに卒業論文、修士論文を書き、長崎に来てからもラシーヌを続けていたのですが、17世紀当時の演劇、とくに劇場や舞台、俳優、観客について調べるのが面白くなり、今に至っています。

外語短大・外語大でどのような授業を担当なさっていましたか。

1972年4月に長崎外国語短期大学に赴任しましたが、そのとき担当した科目で今も覚えているのが「1年フランス語文法」と「文学概論」です。

初学者向けの文法を教えるために、徹底的に仏文法を勉強し直しました。そのとき気づいたのは、自分の文法理解度はなんと浅いことかということです。「教えることによって学ぶ」とか、「しっかり学ぶためには教えることだ」などと言われたりすることがありますが、たしかにその通りだと感じました。

もうひとつの「文学概論」ですが、担当科目を知らされたときは、めまいがしました。25歳の若造がそんなだいそれたことをと。経験を積んだベテラン教授が担当するような科目ですから。これも必死に準備しました。自分が知っている僅かな知識を総動員し、なんとか授業ノート組み立てて、毎回冷や汗もので教えていました。当時の学生の一人と15年くらい経って再会したとき、その授業のことが話題になりましたが、「全然わからなかった」そうです。さもありなん…。

また、1990年代はじめごろだったと思いますが、石川昭仁先生と相談して「日本語表現法」という科目をつくりました。大学設置以降も同じ趣旨の科目を用意し、重要科目として位置づけました。もちろん、自分でも担当しました。

外国語を学ぶのが外語短大、外語大の基本ですが、日本の高校までの国語教育では、感想文やエッセイのようなものは書かせても、レポートや論文を書くための文章作法を教えていません。資料を調べ、それを踏まえて自分の意見を述べるというような文章です。大学に入るとレポートを書かされますが、それに対する準備はできていません。仕方がないので、大学でやるしかないというわけです。

それと同時に、日本語つまり自分の母語に対する認識を深めることが、外国語学習にも必要だと考えました。言葉に対するこだわりというのが、わたしにはずっとありましたから。言葉を学ぶということは、自分自身を見つめ直すことでもあります。自分の考え方、ものの見方、生き方を。

先生がお考えになる「外国語を学ぶ意味」とは何でしょうか。

フランス語の習得を通じて、自分の慣れ親しんできた世界 ― ものの見方、考え方、常識 ― とは違った世界があることを学んでほしいと思いながら、学生に接してきました。言葉が違えば、世界の見え方も、考え方も、随分と違ってくるからです。

自分の常識や固定観念から一歩も二歩も外に出て、違った世界に自分をおいて見ること、それが「狭い自分の殻」を打ち破る第一歩となります。

ゲーテは「外国語を知らない者は自分自身の言語について何も知らない」とも言っています。また、言葉を学ぶ意味について、フランスの哲学者で批評家のロラン・バルトは、こう言っています。

Apprendre une langue, c'est apprendre comment l'on pense dans cette langue.
― Roland Barthes（1915-1980）

ある言語を学ぶということは、その言語で人はどう考えるかを学ぶことだ。

世界には様々な言語がありますが、それぞれの言語にはその言語固有の特徴・個性があります。それは、言語によってものの見方、とらえ方、認識の仕方が異なるということです。

そのことは、外国語を学ぶことによって、知ることができます。そして、外国語と自分の言語とを比較し、違いを知ることを通じて、自分の言語特有のものの見方や認識の仕方を知ることができるようになります。つまり、自分の言語を客観的に見ることができるようになるわけです。

反対に、外国語を知らなければ、自分の言語を客観的に見ることはできないでしょう。別の言語と比べることによってはじめて理解できる違いを知ることなしには、自分の言語の特徴や個性を知ることはできないでしょう。まさにそれが、ゲーテの言っていることです。

できれば複数の外国語をしっかり学んでほしいですね。ひとつの外国語しか知らないと、今度はその外国語がまた一つ別の固定観念 ― つまり、外国語というのはこういうものだという思い込み ― をつくる原因になるおそれがあるからです。複数の外国語を学べば、それぞれを比較することで、より客観的に言葉を見る目が養われるようになります。

泉町キャンパス時代の思い出を教えてください。

主な学内行事としては、もちろん外語祭がありました。教職員・学生ともに賑やかにさわいでいました。最後はキャンプファイアーのような火を盛大に燃やして締めくくっていましたが、今ではできないでしょうね。

キャンパス内で講演を頼まれたこともあります。1970年代の終り近い頃だったと思います。「言葉を学ぶ意味」という題で話しました。わたしがずっとこだわっていた（今でもこだわっている）テーマです。随分気合を入れて準備したことを覚えています。残念ながら、お客はあまり来ませんでしたが。

各言語の暗唱大会もありました。ある年、暗唱大会のときに大雪が降って、家に帰るのに何時間もかかってしまいました。長崎の狭い道に、雪で立ち往生した車がいっぱいになって、動きが取れなかったことを思い出します。

当時のキャンパス周辺の面影は、いまは跡形もありません。マンションが建ち、道路も広げられ整備されています。入口だった場所にキャンパス跡地の碑がありますが、それだけです。

当時の学生たちはみな、陽気で、屈託がなく、元気いっぱいでしたね。今も多分そうでしょうけれど。

最近のご活動について教えてください。

16世紀末から17世紀はじめに活躍した、ある俳優の評伝に取り組んでいます。実は、若い頃始めた研究課題だったのですが、中断したまま長い時間が経ってしまいました。いわば店晒しにされた宿題のようなものです。これだけはなんとか仕上げないといけないと思っていますが、なかなか進みません。

数年前から取り組んでいるのは、ジャック・フィリップというフランスの司祭の著作の翻訳です。ところが本を出してくれる出版社がみつからないので、自分で出版業を始めました。それが戸口書店です。パソコン一台で、翻訳から編集、表紙のデザインまで、全部一人でやっています。戸口書店についてはこのサイトをどうぞ（https://toguchi.base.shop/）。

最後に本学の卒業生及び在学生に向けて、エールをお願いします。

卒業生に向けて　「違いがわかる人になっているでしょうね。」
在校生に向けて　「言葉を学び、新たな世界に旅立とう！」

戸口先生、ありがとうございました。

今回掲載された特集記事は戸口先生に対するインタビューの一部を編集・抜粋したものです。詳細については別途、本学の『新長崎学研究センター紀要』第5号への掲載を予定しています。

ぜひともご期待ください！　（インタビュアー：冨田 高嗣、記録・編集：藤本 健太郎）